

要 旨

説明的文章において、要旨を読み取るために要約の学習に取り組んだ。そのために、キーワードをとらえる力と要約文を書く力の高まりを目指し手立てを考えた。キーワードをとらえるため、要約文モデルの提示や観点の提示、意味段落の小見出しを基にキーワードを見付けることなどに取り組んだ。また、要約文を書くための観点の提示や推敲する活動を取り入れた。その結果、内容を正確に読み取る力と要約文を書く力が高まってきた。

〈キーワード〉 ①キーワードで要約 ②観点の提示 ③推敲する活動

1 研究の目標

「読むこと」（説明的文章）において、目的をもって文章を要約する活動を通して、要旨や筆者の主張を読み取る力と自分の思いを適切に表現する力を高める指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

小学校国語科では、国語を適切に表現し正確に理解する能力の育成が求められている。平成16年度佐賀県小・中学校学習状況調査結果では、「読むこと」の領域において文章構成、表現の工夫や特徴を読み取る問題で全国通過率を下回っており、どの領域も自分の立場や考えを、根拠をもって説明する力が不足していた。言葉を手掛かりにして適切に表現するためには、言葉の正確な理解が必要である。文章に書かれたものを正確に理解し、それに基づいて自らの考えを表現していく能力の育成が必要であると考えた。

これらの問題点を解決するために、本研究では、筆者の考えや表現の工夫に着目し文や段落の関係を考え、キーワードを手掛かりに正確に内容を理解する活動に取り組む。ここで扱う説明的文章は、具体例を示しながら自分の主張を書き進めた文章である。客観的な文章で、しっかりした文章構成や特徴的な表現の工夫が見られ、要旨や筆者の主張を読み取るのに適した文章である。要約とは、文章の要旨、主題、粗筋などを短くまとめるために用いる手法である。さらに、表現力を育てるために、要約文を書く活動に取り組む。また、単元の中に要約を生かす実の場を設定することで目的をもって要約の学習が進められると考えた。

上記のことを踏まえ、本研究では、思考力を高めるために、説明的文章において要約する学習を取り上げ、要旨や筆者の主張を読み取る力を付ける。また、表現力を高めるために、相手に内容の分かる要約文を書く活動を工夫し、自分の思いを適切に表現する力を高めるために本目標を設定した。

3 研究の仮説

要約する場面において、文章内容や構成からキーワードを適切にとらえ、文章の論理構成を考えながら要約文を書き推敲する活動を取り入れれば、要旨や筆者の主張を読み取る力と自分の思いを適切に表現する力が高まるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 説明的文章における的確な読みと要約についての理論研究
- (2) 授業実践のために、単元「環境クイズの説明書を書こう」「身近な生活について討論しよう」での授業（対象学年：5年，児童数：24名）及びその分析と考察

## 5 研究の実際

### (1) 要約について

小学校学習指導要領解説国語編にある要約に関する指導事項は、以下の通りである（表1）。

表1 要約に関する指導事項

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
「読むこと」 内容 イ	時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。（言語事項 エ文及び文章構成 ア文の中における主語と述語との関係に注意すること）	目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を正しく読むこと。 ・ 段落の要点を抜き出ししたり、意味のまとまりごとに小見出しを付したりするなど内容を整理する。 ・ 接続語、文末、繰り返し語句などの言葉も押さえておく。	目的や意図などに応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること。 ・ 表現に即して要約する学習を基に、目的や意図に応じて内容を短く要約したり、敷衍したりしてまとめる。 ・ 実際の文章について要旨を書きまとめる学習を繰り返し行う。

低学年では、言葉に着目し書かれていることの内容を、的確に理解し大体をまとめる。中学年では、文章構成や中心点を考え、筆者の主張や述べ方に徐々に目を向けさせまとめる。高学年では、筆者の意図や論理などを押さえながら、自分の読み取り方でまとめていくことが大切であると考えられる。低・中学年には「要約」という言葉は出てこないが、高学年の「要約する学習」にスムーズに取り組めるよう、低学年からの系統立てた指導が必要である。要約とは、文章で述べられていることを短くまとめたものである。一般的に、段落、複数の段落の要約をつなげ文章全体を内容に即して短くまとめたものが大意的要約であり、筆者の主張が述べられている段落を中心に短くまとめたものは要旨的要約と言われている。

### (2) 説明的文章の読みにおける要約について

説明的文章の読みを、森田信義は、「言語表現を手掛かりにしながら内容を理解するとともに、その内容がどのような論理構造のものとして実現しているかを確認する」<sup>(1)</sup>と述べている。このことから、筆者の考えを理解し、それが、どのような論理的思考に沿って述べられているかを確認しながら読むことが大切であると考えられる。説明的文章を要約する指導過程（表2）では、意味段落の内容を考え、筆者の考えが表れているキーワードを筋道立ててとらえることを重視している。筆者の考えのまとまりである意味段落の中で全体を見渡し個々の段落に目を向け、キーワードをとらえる。さらに、キーワードをつなぎ必要な言葉を加え、目的をもって要約文を書く。意味段落の要約文をつなぎ文章全体の要約文を書く。筆者の思考をなぞりながら、キーワードをつなぎ文章を書く中で表現力が育ち、要旨をとらえることができる。と考える。

表2 説明的文章での要約の指導過程



### (3) 実践化へ向けて

本研究では、要約の初歩段階にある児童の実態を考え、表現に即して要約する学習に取り組む。要約の力を高めながら要旨を読み取るために、キーワードへの着目の仕方と大意的要約の方法を身に付けることが大切であると考えた。そこで、説明的文章を要約するに当たり、キーワードを見付ける力と要約文を正しく書く力の2つが必要であると考えた。

#### ア キーワードを見付ける力

文章の要旨をとらえるには、キーワードをとらえる指導が重要である。キーワードとは、話題について、筆者の意図を表している語句である。筆者の考えのまとまりである意味段落からとら

えさせることで、筆者の考えを理解しながらキーワードをとらえることができると考えた。そこで、まず正確に読むことを念頭に置き、キーワードを正確に見付け出すことで、読みの力を高めたいと考えた。

イ 要約文を正しく書く力

論理的な要約文を書くためには、筆者の論理構成を理解し、筆者の意図が表れているキーワードを基に要約文にまとめることが大切である。そのためには、基本的な言語事項や読み取った筆者の考えを内容に盛り込むことが必要である。正しく書くための基本的な言語事項の定着と筆者の意図をまとめることで、要約文を書く力を高めたいと考えた。

(4) 授業の実際

授業実践Ⅰでは、主に意味段落のキーワードを見付けること、授業実践Ⅱでは、主に要約文を書くことに取り組んだ。

ア 単元 授業実践Ⅰ「環境クイズの説明書を書こう」（3時間）教材「森林のおくりもの」

授業実践Ⅱ「身近な生活について討論しよう」（2時間）教材「インスタント食品とわたしたちの生活」

イ キーワードを見付ける力の高まり

(ア) 授業実践Ⅰの実際と結果（見付ける観点・要約文モデルの提示、自力キーワード見付け）

キーワードを見付ける力を付けるために、見付ける観点（表3）を提示した。その際、教師が作成した要約文モデルを提示し見付けるための手立てとした。教材文と比較させ、要約文モデルを手掛かりに見付ける観点を活用させ、意味段落のキーワードを、理由を付けて考えさせた。「繰り返し出てくる言葉」や「筆者が言いたいことを表している言葉」の観点を使って、意味段落のキーワードである「紙」を、理由を付けて、全員が見付けることができた（表4）。

表3 キーワードを見付ける観点とその理由

- ① 筆者が言いたいことを表している言葉  
筆者の文末表現や接続語（「である」「つまり」等）の記述の特徴から見付ける。また、段落の始めや終わりにあることが多い。
- ② 繰り返し出てくる言葉  
文章中に頻出する語句は文章の中心的な話題に関係し、筆者の意図を表す場合が多い。
- ③ 言いかえてまとめている言葉  
段落の中でいろいろな事例をまとめてある言葉は抽象性が高く筆者の意図を表すことが多い。
- ④ 初めて出てくる言葉  
意味段落の話題が変わると、語句も今までで出てこなかった新しいものが出てくるが多い。

意味段落の内容が「紙」であると確認し、各段落のキーワード見付けに移った。20段落のキーワードは全員「紙」とした。21段落のキーワードを「かけがえのない働き」とした児童は24人中21人、「欠かせない働き」とした児童は16人であった。意味段落のキーワードをとらえられたことで、筆者の考えの中心点を読み取ることができたと考える。また、表4の児童の発言から、「紙はかけがえのない、欠かせないものである」ということを読み取れていることが分かる。筆者の考えの中心点を読み取ったことで、他の段落のキーワードも見付けられるようになった。

表4 観点を使った人数と児童の発言

観点	人数	児童の発言
①	21	・ 紙は生活になくなくてはならないものと書いてあるので大切だ。 ・ 紙が必要なことを書いてあるから。 ・ 紙を強調することを書いてあるから。
②	6	・ 紙を説明している言葉が繰り返し出てくるから。
③	0	
④	0	

その後、キーワードを見付ける観点を使って、自力でキーワードを見付けさせた。ここでも児童は、「繰り返し出てくる言

表5 キーワードを見つけた人数の変化

数	1時目	2時目
3	5	11
2	3	9
1	11	4
0	5	0

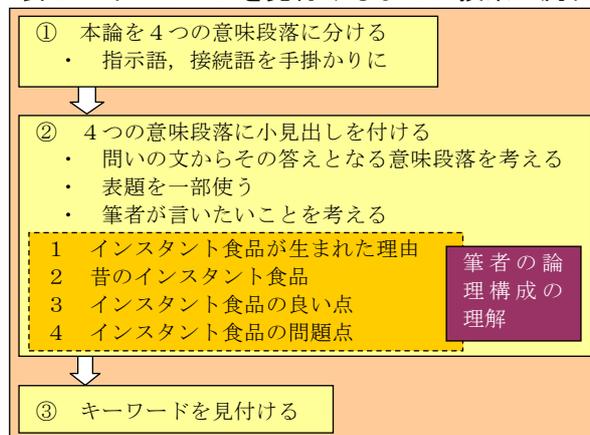
葉」や「筆者が言いたいことを表している言葉」の観点を使っていた。

前頁表5から、2時目は1時目よりも見付けたキーワードの数が増えていることが分かる。児童は、見付ける観点を活用して、キーワードを見付けることができるようになってきた。このことから、見付ける観点が、キーワードを見付ける力の高まりに効果的だったと考える。

(イ) 授業実践Ⅱの実際と結果（小見出しからキーワード見付け）

文章構成を考えながら、キーワードを見付ける方法でアプローチした。意味段落の小見出しからキーワードを見付けさせた（表6）。小見出しを手掛かりにして「①インスタント食品が生まれた理由はなんだろう」「②昔のインスタント食品はどんなでしたか」のように発問し、答えていくことでキーワードを見付けさせた。その結果13人中、11人の児童が11の段落から10以上のキーワードを見付けることができた。筆者の考えを読み取らせ、全体的な文章構成を考えた上で小見出しを付けさせたことで、キーワードを正確に見付けることができたと考えられる。

表6 キーワードを見付けるまでの授業の流れ



(ウ) キーワードを見付ける力の高まりについての考察

授業実践Ⅰでは、キーワードを見付ける観点を示し、要約文モデルを使って観点の活用を図った。前頁表5に示すように、1時間目は観点を使ってキーワードを見付けることができなかった児童も、2時間目には観点を使ってキーワードを見付けることができたことが分かる。また、表7に示すように、要約文モデルなしでも観点を使った児童が増えていることが分かる。観点が定着しキーワードを見付けることができたことは、正確に読む力の高まりが見られたと考える。要約文モデルと見付ける観点を示したことは、内容を正確に読み取る力を高めることに効果があったと言える。授業実践Ⅱでは、小見出しを付ける活動までの間に、内容や段落構成を理解させていたので、正確に数多くのキーワードを見付けさせることができた。このことから、小見出しからキーワードを見付ける手立ても有効であることが分かった。

表7 観点を使った人数の変化

観点	要約文モデルを使ったとき	自力で見付けたとき
①	21	14
②	6	18
③	0	3
④	0	0

ウ 要約文を正しく書く力の高まり

(ア) 授業実践Ⅰの実際と結果（要約文を書く観点の提示）

授業実践Ⅰでは、要約文を書く観点（表8）を提示して、要約文を書く手立てとした。要約文を書く際に言語事項面と内容面から考えて4つの観点を設定した。その結果、観点を活用して、60%の児童が正しく書くことができた。表9では、どの観点を使って要約文を書いたか下線で対応させた。児童はキーワードを基に、書く観点を活用しながら要約文を完成させていることが分かる。

表8 要約文を書く観点

①	<u>段落の流れを考えキーワードを落とさない。</u>
②	<u>主語、述語を考える。</u>
③	<u>本文の中から必要な言葉や文を使う。</u>
④	<u>接続語が必要なときは加える。</u>

表9 児童の主な要約文

<p>木材は火になります。長い年月人類は火を使い続けてきました。例えば、<u>食事をするときお湯を沸かすときなどまきや炭が使われました。</u></p>
--

(イ) 授業実践Ⅱの実際と結果（要約原稿の工夫、読み返して推敲する活動）

正しく要約文を書くための手立てとして、小見出しとキーワード、各意味段落の書き出しを記入した要約原稿（次頁図1）を用意した。書くことに抵抗を感じていた児童も全文要約を書くことができた。書くための手掛かりとなる内容を、事前にもたせることが大切であることが分かった。

次に、読み返して推敲する活動では、まず、推敲する観点①②③④（表10）について例文を提示し、推敲の仕方を練習させた。その後、推敲の観点に従って、各自で推敲する活動を行わせた。推敲前と後での教師による推敲の観点の合格者数（表11）の人数を比較すると、合格の人数が増えて

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	稲蓬キワード	インスタント食品とわたしたちの生活 本論要約文	
・栄養のかたより	・料理を少なくすることが	・戦後、女性が社会に出て											

図1 小見出し、キーワード、書き出しを表記した要約原稿

いることが分かる。推敲の観点を活用することで、要約文を修正する箇所が分かり、児童が要約文と教材文を見比べながら言葉を意識して推敲活動を行ったことがうかがえる。

推敲の観点の④では、筆者が本論の中で最も大切に考えていることを、理由を付けて1か所選ばせた。その結果、13人中、「栄養のかたより」を選んだのは8人、「料理をするのが少なくなる」は2人、「料理の時間が短くなる」「価格が安い」「家庭の味が失われる」は1人ずつであった。児童は、「健康が一番大切だから」「体によくないことを最後にいいかかったと思う」などと、理由を付けていた。このことで、筆者の考えを再度考えさせ、読みを深めることができたと考える。

表12に示すように、推敲の観点に合わせて修正をしたことが分かる。①から③までは言語事項について、正しく書くための基礎的な言語事項を、教材文を基に修正することができた例である。また、⑤、⑥は、正しく内容を書くための観点から教材文を基にして、修正することができた例である。

(ウ) 要約文を正しく書く力の高まりについての考察

要約原稿を工夫したことで、これまで支援が必要な児童が、自力で要約文を書くことができた。書き出しやキーワードを示したことで、書く内容を知り、それに続く文章を考えやすくなったからだと思う。要約原稿を工夫することは有効な手立てであった。推敲活動をすることで、言語事項面、内容面において正しく要約文が書けた。表12の例のように、推敲の観点を生かして、ほとんどの児童が修正できた。推敲活動で推敲の観点を提示したことで、要約文を書く力の高まりが見ら

表10 推敲の観点

<b>言葉のポイント</b>
① 主語、述語を考えて書く。
② 接続語を考えて書く。
③ 文末を考えて書く。
<b>内容のポイント</b>
④ 大切なところを詳しく書く。
⑤ いらないところは削る。
⑥ 文と文のつながりを考えて書く。

表11 推敲の観点合格数(13人中)

観点番号	推敲前	推敲後
①	10	13
②	1	12
③	7	11
⑤	9	13
⑥	8	13
キーワードの落ち	5	11

表12 児童の推敲例

① 主語の付け加えの例 (A児)
・ そんな社会の中で料理の時間を短くするために～ インスタント食品は、
② 接続語の例 (A児)
・ 家庭で作る料理の味とあまり変わらない。また、加工されていない食品に比べ長い間、保存できる。価格という面でも安くすむというよさがある。 さらに、
③ 文末表現の例 (B児)
・ 味もかおりもかなりちがうものでした。【だった】
⑤ 削る部分の例 (C児)
・ 家庭の料理と味やかおりが同じなので工場がかわりに作っている。【だ】
⑥ 文のつながりの例 (D児)
・ 戦後女性が社会に出て、女性が働く時代へと変わって追われていたころ、女性が働くへと変わった。【働くことになり生活が忙しくなった】

れた。また、児童の感想には、要約の必要性や推敲活動の効果、要約文を書く力が身に付いたという記述が多く見られ、要約に対する児童の意識の高まりが見られた（表13）。

表 13 要約文についての児童の感想

- 要約文をしっかりと書くことができると、大人になっても役立つことがあるかもしれないので、これからはいろいろな要約文の書き方などを見付けていきたいです。
- 推敲をしたらとても要約文が分かりやすくなった。
- 森林のおくりものを要約するのは難しかった。インスタント食品の要約をしたときとても簡単にすらすら書けた。

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

#### ア 要旨や筆者の主張を読み取る力について

(ア) 授業実践Ⅰにおいて、要約の学習を展開する上でキーワードを見付けるための観点を提示したことは、文章を正確に読ませるための有効な手立てとなった。筆者の考えのまとまりである意味段落を言葉に着目させ、どの言葉がキーワードとしてふさわしいか考えさせることで、言葉を比較しながら、選択する力が身に付いてきたと考える。その結果、「筆者の言いたい言葉はこれ」「この言葉ははずせない」など、キーワードを正確にとらえることができるようになった。これらのことから要旨や筆者の主張を読み取る力が高まったと言える。

(イ) 授業実践Ⅱでは、意味段落に小見出しを付けてキーワードを見付ける活動で、筆者の論理構成を考えさせることが大切であることが分かった。その結果、児童は各段落から正確にキーワードを見付けることができた。また、児童の書いた要約文を見てみると、論理構成を理解させることで、要旨をとらえた要約文が書けるようになり、要旨や筆者の主張を読み取る力が高まったと言える。

#### イ 自分の思いを適切に表現する力について

要約文を書く上で、言語事項面と読み取った内容を正しく書くことが大切である。今回、児童の実態を踏まえ、筆者の論理構成に基づき、正しく要約文を書くところからスタートをした。授業実践Ⅰ・Ⅱでは、要約文を書く観点を示したり推敲する活動に取り組みせたりする中で、キーワードを基に正しく要約文が書けることを目指した。その手立てとして、読み返して推敲する活動で推敲の観点を示した。その結果、言語事項面、内容面ともに推敲の観点を活用して修正ができるようになった。推敲の観点が有効な手立てであり、適切に表現する力が身に付いた。

### (2) 今後の課題

ア キーワードを見付ける活動や要約文を推敲する活動において、筆者の考えを基に、自分と他者との考えを比較しながら、互いの考えを高め合う交流の在り方工夫する必要がある。

イ 自分の思いを適切に表現するための手立てとして、内容に軽重を付けるために詳しくする部分と省略する部分を考えて書かせることや、キーワードの中から必要なものを選択させて要約文を書かせることなどの工夫が必要である。

### 《引用文献》

- (1) 森田 信義 『説明的文章教育の目標と内容』 平成10年 溪水社 p.54

### 《参考文献》

- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成11年 東洋館
- ・ 言語技術教育研究所編 『教育科学国語教育』 2001年 明治図書
- ・ 坂口 忠 『文章分解統合方式による要約指導』 1994年 明治図書
- ・ 吉本 清久編著 『要約力を磨く説明文の指導』 2004年 明治図書